

担任の先生へ

吃音（どもり）のある子どもについて

◎吃音とは

吃音とは、思うように滑らかに言葉が出てこない状態をいいます。

吃音で悩む人は、ギリシャ時代から既にいたことがわかっています。現在、原因については、後天的に獲得されるもの（親の育て方や環境）ではなく、発語時の脳の伝達トラブルなどが原因ではないかとされていますが、様々な要因が複雑に関わり合い、治療法がこれという一つには確立されていない状態です。



歴史的にいくつかの治療法が提案されましたが、確実にこれなら誰でも効くという治療法は今のところないのが現状です。

具体的には・・・

吃音の主な症状には、以下の三つがあります。

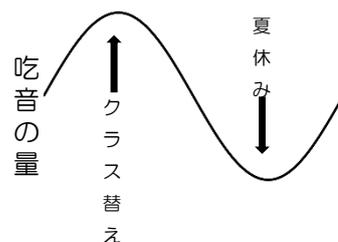
症状	ことばの様子
繰り返し（連発）	お、お、お、 はよう
引き伸ばし（伸発）	おー はよう
詰まり（難発）	……っお はよう



症状としては悪化

子どもによって、これらの症状がいくつか組み合わさっていることが多いです。また、話す場面や状況、時期によって波がある子もいます。

また、上記のような症状以外に以下のような様子が現れてくることもあります。



症状	体・話し方の様子
随伴症状	舌を出す、まばたき、首を動かす、手足を振る等。
工夫	<p>吃りそうな言葉を別の言葉に言い換える。 「わからない」と言って終わらせる。 考えているふりをする。</p> ……わからない
回避	<p>言いたい言葉そのものを言うのをやめてしまう、もしくは会話すること自体をやめてしまう。</p>

たくさん繰り返したり、詰まったりしていても
言いたいことを自由に話している状態

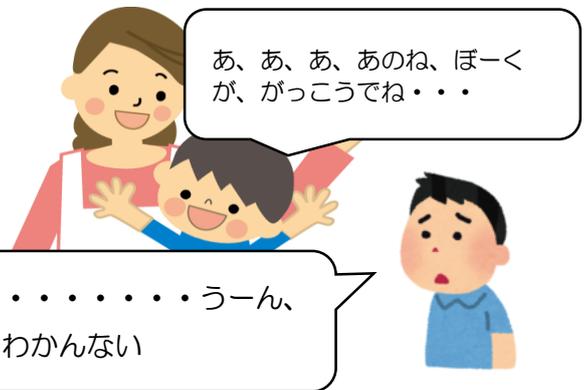
症状としては軽い

重い



学年があがると増えてくる

吃音が目立たなくても随伴症状があったり、
工夫や回避が見られたりする状態



※幼児や低学年の児童の場合は、自分の吃音について、まだあまり自覚していないことが多いように見えます。でも、一生懸命話したのに「今なんて言ったの?」「なんでそんな話し方するの?」と聞かれたり、聞いている相手の表情が変わったりすることで嫌な思いをしている子供たちは多いです。

◎担任の先生にお願いしたい配慮事項

- ①吃音について指摘されたり、質問されたりしている時は、吃音は自分では治せないことを、発達段階に応じて、学級の子どもたちに話して理解させてください。
- ②本人がどもって話していても、ゆったりとした気持ちで、内容を聞いてあげてください。
- ③「どもっていたって、言いたいことを言っているんだ」と思える学級の雰囲気づくりをお願いします。

具体的な学校生活の場面では・・・

日直や音読の発表・・・二人以上で声を合わせると吃音は出にくいことが多いです。なるべくなら、ペアで声を出すように設定してください。

九九のテスト・・・詰まって出にくいことが心理的に負担になることが多いです。速さを求めず、ゆったりした場面や状況の中やるか、保護者と協力して家庭でテストをしてもらう等柔軟な対応をお願いします。

学芸会など・・・二人で一緒にセリフを言う、言いやすい言葉から始められるようにセリフを変更するなど、工夫をお願いします。

※以上のような対応が考えられますが、いずれにしても勝手にするのはなく、本人とどうした方がよいか相談してください。(本人が配慮を希望しないこともあります)

◎ことばの教室では

吃音は、言葉の流暢性の問題だけでなく、コミュニケーション全体の問題と言えます。そこで、ことばの教室では、一人ひとりの子どもについて、様々な視点で情報を集め、下記のようなねらいで指導していきます。

- ① 吃音のことを気にせず、話したり、遊んだりすることで、話すことへの抵抗感を減らす。
- ② 吃音に対する正しい知識を身に付け、吃音を必要以上に恐れないようにする。
- ③ 必要があれば、力を抜いた発声な話し方を身に付けさせる。
- ④ 同じ悩みをもつ児童同士のグループ学習を通して、悩みを分かち合うことで、安心感を得たり、吃音に対する否定感情を軽減したりする。

担任の先生とは電話や連絡帳での共通理解を図り、より良い方法を見つけていきたいと思えます。

